

第一部門 〈哲学・思想に関する論文〉 入選論文

教養主義者の救済論

— 読書家としての暁烏敏 —

碧海寿広



碧海寿広さん

[略歴]

年 齢 31歳
住 所 京都府京都市在住
経 歴 平成21年 慶應義塾大学大学院社会学研究科 単位取得退学
宗教情報リサーチセンター研究員を経て
現在 龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員
博士（社会学）
主 論 文 「哲学から体験へー近角常観の宗教思想ー」
(『宗教研究』364号2010年6月発行)

[応募動機及びコメント]

清沢満之や近角常観など、近代真宗史の重要人物に関する研究をしている私にとって、暁烏敏は以前から本格的に論じてみたいと思う仏教者の一人であった。「読書家としての暁烏敏」という着眼点を得たことで、自分なりの暁烏像が描けるだろうと確信するに至り、論文の応募を決意した。今回の受賞を励みとして、今後、暁烏の思想と行動の全体像を大きく見直す研究を進めていきたいと思う。ありがとうございました。

〔梗概〕

暁鳥敏は近代日本の仏教者の中でも指折りの読書家の一人であった。だが、そうした観点から彼の思想や事績について詳しく検討した論考は今のところ皆無である。本論は、主に明治後期から大正期にかけての暁鳥による書物との接し方について検討しつつ、議論をさらに発展させて、近代における人間と宗教と本（読書）との関係について考察した。

青年時代の暁鳥は、宗教界における立身出世の野望を抱いて、当時のエリート青年たちにとつての必読書を熱心に読んでいた。その書物の中には、たとえば内村鑑三などキリスト者による著作も含まれており、彼はそれらの作品に感化されて、キリスト教からの多大な影響のもとで仏教書を読む「異端」的な仏教者となつていった。

それは彼の『歎異抄』の読み方に端的にあらわれていた。明治後期において、暁鳥による『歎異抄』読解は人気を博したが、同書に対する彼の向き合い方は、キリスト教徒が聖書に対してするかのような態度であった。『歎異抄』を唯一無二の絶対的な書物として、そこに記された絶対他力の信仰に身も心もゆだねきつた彼は、しかしただ一冊の本に記された言葉にのみ自らを縛りつけるという、読書の隘路にはまつていった。大正初期に妻を喪つた彼は、『歎異抄』から自身が読み取った絶対的信仰の幻想性に気づき、挫折する。そしてその挫折から立ち直るためにも、より多様な書物を読むことで宗教家としての教養を深めつつ、同時に、自らの本に対する接し方の難点、すなわち、他者の言葉への影響のされやすさを猛省していく。

その徹底した反省の果てに暁鳥は、書物に記された他者の思想に染まることのない自己を確立することの必要性を論じ始めた。他者の言葉の織物としての本に依存することでは、人は決して救われない。そうではなく、他者の言葉によつて生の意味を獲得しつつ、だが他の誰でもない

自分自身を肯定してこそ、書物は人間の自己救済に貢献しうる。これが大正期における教養主義者としての暁鳥が至つた結論であった。

はじめに

暁鳥敏は読書家であった。青少年の頃より晩年に至るまで、膨大な量の本を読み込み、その幅広い読書経験を通して自らの思想を鍛え上げてきた。そして口頭や文章でその思想を語り、書いてきた。本を読み過ぎたせいもあつてか、生涯の後半期には視力が極度に低下し、やがて視力を失うが、それでもなお侍者による朗読によつて多量の読書を行い続けた。読んでいた本のジャンルは、僧侶の本分として経典や各種の仏教書はむろんのこと、それ以外の宗教に関する書物や、あるいは文学や哲学や歴史などのいわゆる人文系の著作を中心に多岐にわたつた。ふところ事情があまり良好でない時でさえ、関心のある本を購入することには躊躇がなかった。生涯に蒐集した書物の数は五万冊を超えた。

彼は教養主義者であつた、と言つておそらく誤りではないだろう。あるいは教養主義的な仏教者と評してそう的外れではないはずである。近代日本の仏教者として、ここまで多彩な読書経験に基づく人間形成を自らに課した人物は珍しい。ジャンルを問わない幅広い読書を通じた人格の完成を目指した仏教者。そのような人物として暁鳥を見直すことで、彼の思想や事跡に新たな光をあてることができるのではないか。本論のまずもつての問題意識はそういったところにある。

特定の宗教を信じている者が、色々なタイプの本をたくさん読む。そこにはどのような意義があるのだろうか。たとえば、自己の奉じる宗教以外の様々な宗教に関する書物を読み込み、それぞれの宗教の特質についての比較考察的な思いをめぐらすことで、自己の宗教と他宗教との共

通性や異質性——ひいては自己の宗教の独自性——に関する理解を深めていくことができるだろう。また、古今東西の小説や思想書から多様なアイデアを吸収し、そこから語彙や論理や修辭を借りてくることで、自身の宗教思想を育成し、その表現方法を洗練させていくこともできるだろう。あるいは、時事的な話題を扱った文章を継続的に読む習慣によって、自分の信じる宗教の捉え方を、時勢にあわせるかたちで適切に変化させていくことも可能かもしれない。

こうした読書による恩恵を、暁鳥もまた被っていた。彼の宗教に対する理解や自らの信仰に関する語りは、その厚みのある読書経験のお陰で人並み以上に優れたものになっていたことは間違いない。だが、本論がこれから主に問うていく読書と宗教、あるいは教養と宗教に関する論点は、そうしたものとは次元をやや異にする。

人は本との関係においてどのように救われうるか。これこそが本論の主題である。読書による救済とは、いかにありうるのか。たとえば、特定の聖典と出会い、そこに記された文字のつらなりに身をゆだねることによって心安らくなる体験とは何か。あるいは、いくつもの本の中から生き方のヒントを導き出し、その教養の力によって自らの人生を肯定していく実践とはいかなるものか。暁鳥という読書家の、主として明治後期から大正期のテキストを読み直すことを通して、本論はそうした主題について熟考することを試みる。

日本の近代における宗教は、それ以前の時代に比べて、書き言葉を重視する傾向を強めた。日本の伝統的な宗教行動である、寺社を訪れ現世の利益を祈る活動や、年間の節目ごとに死者の供養に携わる営みなども、もちろん前近代から引き続き行われていた。だがそれと同時に、書籍を通して宗教に関する知識を獲得したり、自己の宗教体験について執筆したりするといった行いが、僧侶などの宗教の専門家だけでなく、一般人の間にも普及していった。紙に書かれた文字を媒介にして宗教に接近す

る人々が増えていった。文字言語によってある宗教の内容や意味が規定される可能性の大きさ。それが近代における宗教をめぐる特徴の一つであるといつてよい。

文字言語を通して宗教にアクセスするという手続き、あるいは文字言語を中心的な素材とした作品である本を読むことで何らかの救いを得るという経験は、近代において飛躍的に広まっていった文化的背景であり——そこには、識字率の向上や印刷技術の発達といった社会的な背景がむろんある——、また現在もなおその性質を微妙に変化させながら着実に反復されている文化現象である。そうした大前提から出発する本論は、暁鳥という仏教者の書物との関係について論じるという、一見したところ非常に限定的な対象を扱った論考でありながら、しかしそのような個別的な議論を超えた次元を指摘している。すなわち、我々がいまもなおその一員として生きている、近代社会における人間と宗教と本（読書）との関係性をめぐる、より普遍的な考察へと思惟を広げていくことも視野に入れていく。

こうして本論の視座や前提、ねらいについてはおおよそ語ることができた。それでは、本題に入っていくべきだ（1）。

一 読書による立身

明治の時代、青年たちは新しい世界を夢見て努力した。生まれたときから自分の生きる道や課せられる役割が定まってしまっているのが普通であった封建制の世から抜け出し、自由と可能性に満ちた新世界へ。自由を勝ち取り、可能性を広げるためには、新世界に適應していくための勉強が求められた。新しい世界のへの入り口は西洋社会からもたらされたので、西洋の文物や西洋的な考え方に習熟することが必要とされた。

西洋から輸入された書物を読み、西洋の書物から影響された論者の言説にふれることが、青年たちにとっての規範的な行動文化となった。

明治の青年僧侶であった暁鳥もまた、こうした行動文化の圏内にいた。学生時代の彼の本棚には、当時の著名な西洋作家たちの書いた本が数多く並べられていた。

一番最初に外国人の書いた書物で私の心を動かししたのは、スマイルスの『自助論』であります。かの「天は自ら助くるものを助く」という金言を冒頭に掲げてあるあの書物は私を鼓舞してくれた。その後には私の感じた書物はカーライルの『英雄崇拜論』であった。これも非常に深い感銘を私に与へてくれた。それから次に影響を受けたものはエマーソンの『論文集』で、これは二十四五歳の頃の私に大なる影響を与へた。「一六・三三二」

ここで筆頭に挙げられている『自助論』とは、もちろん英国の作家サミュエル・スマイルズの代表作であり、日本では中村正直が『西国立志編』と題して訳出し、福沢諭吉の『学問ノススメ』と並ぶ明治のベストセラーとなった。特に立身出世を志す明治の青年たちにとっては必読の書であった。続くトマス・カーライルの著書も明治期にはよく読まれた作品であり、同著者の思想は内村鑑三や新渡戸稲造など、近代日本の知識青年に多大な影響を与えた人物たちにも熱烈に支持された。米国のエマーソンの著作もまた、人生修養の書として、理想的な生き方の指針や動機付けを求める若者たちに広く受容された。

こうした読書傾向を確認する限り、暁鳥は立身出世を志望する典型的な明治青年の一人であったとみなすことができるだろう。石川県の村落の真宗大谷派寺院の長男として生まれ、将来はその寺院の住職になることを周囲から期待されていたが、その期待に応えることのみで自分の人生をまっとうすることを、彼はよしとしなかった。自己が属する宗派の改革運動に参加して仲間とともに教団の権威に挑戦し、自らも従来型の

宗派の教えとは異なる新しい宗教論を公表することで、仏教界における地位を確立しようとした。一時的には宗教家として身を立てることに對する自信を失ったが、その際には外国語学校に通いながら外交官になることを志した。

この外交官になるという進路は、師である清沢満之の説得もあって取り消され、新時代の宗教家として世に出ていくという当初の目標にそつた人生行路を彼は歩んでいくことになった。だが、たとえ一時的なことであれ、暁鳥が外交官を志したというエピソードは、自己の人生に對する彼の願望のようなものを推し量るうえで、とても興味深い。要するに、エリートとして生きる、という野心が、青年時代の彼にははっきりとあつたのである。宗教界であれ、世俗社会であれ、不特定多数の同時代人からの賞賛や敬意を受けるような地位において活躍する人生を、彼は強く望んでいた。

そして、そうした地位に達するためには、同じくそうした地位を目指している他の青年たちがみな読んでいる本を自分もまた読むことが必須であると、彼は考えていたはずである。当人による学生時代の読書経験の回顧文を参照すれば、そのように推測するほかない。明治の地方村落に生まれた者が、その地域社会の一員として埋没するのではなく、広い世間での名声を得ようという願いを胸に抱いたとき、西洋人の執筆した立身出世のガイドとなりうる書物を読み、感銘を受け、啓発されることは、ほとんど義務のように感じられたはずである。そうした義務感とは、世俗社会での立身を望む者たちにも、暁鳥のように宗教界での出世を願う者にも、同じように共有されていた時代の感覚であつたと思われる。

だが、あくまでも宗教界での地位確立を目指した暁鳥の本に對する向き合い方は、世俗社会でのみ生きる青年たちのそれとは、やはり異質であつた。とりわけ、他の宗教家の著した作品を読むときのスタンスが、微妙に異なっていた。

根が佛教の出身であり、主として佛教の教育を受けたのでありま
す上に、その時分佛教徒の多くはキリスト教を仇敵のやうに思ひ外
道のやうに観てをつたのに拘らず青年期における私は、松村介石先
生の書かれた『修養論』や、内村鑑三先生の著はされた『求安録』
などいふ書物によつて非常な力を得、大いなる励みを与へられたこ
とを忘れることは出来ませぬ。(中略)かうしたいろくくと佛教以外
の思想に触れて行つた私は、それがため自然に佛教の内部の人たち
とは漸く思想の傾向を異にするやうになつてまゐり、内部の人から
は、やゝもすれば異端者を以て目せられるやうになつて来たのであ
ります。〔二六・三二二—三二〕

松村介石や内村鑑三など、キリスト教に感化されるかたちで独自の宗
教運動を展開した指導者たちによる著作は、キリスト教の信徒のみなら
ず、いやそれ以上に、明治のエリート青年たちの間でかなり熱心に読ま
れていた。西洋文明の基礎をなすキリスト教に関係した思想や文化に触
れることは、当時のエリート青年たちにとつての教養の一種であつたの
である。暁烏にしても、そうした教養の一環として内村らキリスト者た
ちの著作を読むこともあつただろう。だが、仏教者がキリスト者の本に
学ぶことは、そうでない立場の者がそうすることとは、その意味が自ず
と異なる。自身の信仰や宗教に対する考え方が、それとは明確に異質な
世界観のもとに成り立っている作品の影響下で不可避免的に変容していく
可能性とともに、それらの著作に向き合つていかなければならないので
ある。そして実際に暁烏は、仏教者としては「異端者」とみなされるこ
ともあるほど、キリスト教の影響を被つた。その影響は、たとえば彼の
仏教書に対する向き合い方にも見て取ることができぬ。

明治後期から末期にかけて、彼は一冊の仏教書を、まるでキリスト教
の聖書であるかのように読み込んでいった。そしてその読解から得られ
た知見や発想の一部始終を、講義形式で聴衆に語り聞かせ、さらに時間

をかけて文章に残していった。彼が唯一無二の聖典として選び取り、そ
こに書かれた教えの意義を精魂込めて語り尽くしていったその書物は、
やがて近代日本を代表する仏教書としての地位と評価を獲得し、多くの
知識人にとつてのバイブルのような作品として無数の日本人に読まれて
いくこととなる。

その書物の名を、『歎異抄』という。

二 聖書としての『歎異抄』

『歎異抄』は明治後期に一世を風靡した。浄土真宗の学僧や布教者、
特に革新的な意志に満ちた若い真宗僧侶らが、同書に関する論書や注釈
書を次々と発表し、それらが大きな反響を呼んだのである。それ以前に
も同書が読まれていなかったわけではないが、読者は学僧を中心とした
狭い範囲に限られていたし、またその読み方も他の真宗聖典との関係か
ら同書に記された文言の意味を判定していくような訓詁学的な傾向が強
く、個々の読者による独自の読みや解釈はほとんど許容されていな
かった。それに対して明治後期の『歎異抄』の読み手たちは、親鸞の教
えによつて救われた自らの体験に基づきながら、同書の意義を熱く語つ
た。そしてその信仰告白的な『歎異抄』語りが、自分も同じように救わ
れたいと願う多くの同時代人の支持を集めていったのである。

そうした明治後期の『歎異抄』ブームの主たる担い手の一人が、暁烏
敏であった。彼は明治三六年より宗教雑誌『精神界』にて『歎異抄』を
読む」という記事の連載を開始し、この連載を八年間にわたり継続、そ
して明治四四年に『歎異抄講話』として一書にまとめ上げた。彼による
この一連の『歎異抄』論は、宗派の教義学的な観点からではなく、今に
生きるひとつの実存としての立場からそこに生き方の教えを求めるとい

う態度で同書を読んでいく試みとして、後世の者たちが『歎異抄』を読む際に参照可能な一つの範例を作り上げた。

暁鳥にとって、その書物はどれだけ重要なものであり、また彼は同書とどのようにつき合ってきたのか。本人の証言を聞いてみよう。

私が自分の内部生命にふれて聖人を味はひそめたのは、二十歳の暮時分から、性欲の問題に苦しみかけた時からであった。その時分にひどい罪悪感に沈んでいた私は、聖人の言行録であった『歎異抄』を手にしたのであった。それから十五六年の間、私はこの『歎異抄』によりて聖人と語り、聖人と共に歩んできたのでした。何百遍読んだ事やら、何十回講じた事やら覚えなほであります。(中略)私に若し『歎異抄』がなかったら、私は、自暴自棄な惨めな者になつてしまつてゐたらうと思はれます。私はよく『歎異抄』によりて救はれ、『歎異抄』によりて育てられ、力づけられ、成長してきたのであります。『歎異抄』に現はれたる親鸞聖人は私の終生離るゝ事のできぬ、忘るゝ事のできぬ恩師なのであります。(中略)私は聖人の魂に触るゝ事によつて、どんなに自分が大きくなり、つよくなつたかしれません。聖人は実に私の生命の親であるというてよいのであります。「二三：二五二」

二〇歳から三〇代半ばの青年期の終わりまで、彼は常に『歎異抄』とそこに記された親鸞の思想と共に生きてきたのであった。それを読みそれについて語ること、時に折れそうになる自らの心を勇氣づけ、あるいは宗教家として独立していくためにも、同書を精神的な支えとし続けた。その時代、『歎異抄』は彼にとって他のどんな本よりも遙かに大切な作品であり、決して代わりのきかない究極の一冊であった。「歎異抄」を以つて、世界最大の聖書であると信ずる「六：一一五」と自ら述べているように、それは彼にとって、敬虔なキリスト教徒にとっての聖書のように絶対的な書物としてあった。

『歎異抄』は、この世に存在するすべての本に優る意義を暁鳥にとっては有するものであった。だから、たとえば他の仏教書を読み理解する際にも、その読み方や解釈の規準は当然のごとく『歎異抄』にこそあつた。

一度『歎異抄』の信念にはいつてから、ふりかえつて再び『御一代記聞書』を味はうて見ると、この聖教は倫理的といふよりも寧ろ『歎異抄』の「他の善も要にあらざ、念佛にまさるべき善なき故に」悪をも恐るべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」の教訓の敷衍に過ぎないやうに味はれ、『安心決定鈔』は『歎異抄』の「たとひ法然聖人にすかさまらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」の教訓の敷衍に外ならぬやうに味はるゝのである。「二一：四七九」

『御一代記聞書』も『安心決定鈔』も、それぞれ浄土真宗の重要な聖典ではあるが、それらの聖典に書かれてある内容は、多かれ少なかれ『歎異抄』の内容の敷衍に過ぎないのであるという。こうした解釈の妥当性についてはここでは問わないが、いずれにせよ、親鸞の思想は『歎異抄』にその本質が十全に書き込まれており、同書を読めば真宗の教えの核心は十二分につかみ取ることが可能なのだと、この当時の彼が考えていたことは疑いないだろう。

暁鳥が『歎異抄』から読み出していった親鸞思想のエッセンス、それは、すべてに凌駕する信仰の絶対性であった。絶対他力という一語で端的に表されるその絶対性の前では、いかなる知識や学問も、いかなる倫理や道徳も、無意味である。それが『歎異抄』という一冊の本ともに歩んでいた時代の暁鳥の、内心の確信であった。

かくて『歎異抄』一部の大精神は学問以上、倫理以上の宗教を教へられたものと見える。哲学と云ひ、科学と云うたところが、人間の知識の範囲を出づることはできぬ。その人間の心は変化常なきも

の故に学問に常住の安立を託すことができぬ。倫理と云ひ道德と云うたところが人間の意志や行為に属した事で、善だと云ひ徳だと云うたところで、やはり人間を超ゆるわけにはいかぬ。人間の意志や行為は畢竟無常のものである。故に倫理道德にも永遠の安立を定むることができぬ。仍つて永遠の生命の安立を得るには、人間の学問や道德をあてにはせず、又これなきを苦にせず、たゞ偏へに絶対他力の妙用に託するの外ない。これが『歎異抄』の根本思想である。

〔六：六二〕

人文学にせよ自然科学にせよ、学問は有限的な人間による頭脳や思考の産物であるに過ぎない。どのような立派な徳目も、有限的な人間による約束事ではなく、どれほどの賛辞に値する善行も、有限的な人間による利那的な行為であるに過ぎない。学問や倫理の有限性を超えた絶対的な立脚地を得て、そこを人生の足場とするためには、『歎異抄』に表現された絶対的な信仰の世界を選び取り、それを究極的な規範としながら生きていかなくてはならない。この世のありとあらゆる物事に対する判断規準は信仰に基づく。それ以外はすべてあてにならない。

こうした内心の確信に生きていた暁鳥にとって、たとえば有限であるはずの学問によって宗教への理解を深めようとするような人間は、その誤りを批判されるべき反面教師として敵視の対象となった。

宗教には学者は三文の価値もありませぬ。「何教にはかく説けり」「何論にはかく解せり」これ果して何するものぞ。一切経をそらんじたとして決して佛教の真意を得た人ではない。経文一つ知らないでも、如来他力の不思議海にはいつた人ならば、それこそ大々の佛教徒である。〔六：三二八〕

人がある宗教との関係を深めるには、それをひたすら信仰するしかない。その宗教に関する知識をどれだけ所有していようと、あまり意味がない。だからそれに関する知識の質量において宗教との関係を深めよ

うとする学者にも、あまり価値がない。信仰の絶対性の主唱者である暁鳥の思い入れのほどの強さを十分に感じ取ることができると主張だが、しかしいささか排他的で狭量な意見であるようにも思える。

暁鳥は『歎異抄』を聖書のように読んでいた、と先に書いた。このレトリックをさらに展開させていうならば、『歎異抄』に対する彼の態度は、福音主義者のそれに近似していると考えられることができるだろう。宗教において重要なのは、信仰のみ、あるいは聖書に基づく信仰のみとする福音主義者のスタンスは、『歎異抄』から絶対他力の信仰のみを抽出し、自己の生き方の根拠としてはその信仰以外のいかなる要素もあまり信用しない暁鳥の立場と同類のものである。先に少し確認した彼の読書履歴から推測すれば、福音主義の変種である無教会主義の宣教者であった内村鑑三からの影響をそこに見て取ることも可能だが、この点は指摘するだけにとどめておく。

こうした、単一の聖典のみに自らの信念の規準を求めるような読書の仕方には、どういった利点や難点があるだろうか。ただ一つの書物に記されてある言葉だけをひたすら信賴して生きる。それは、その書物の言葉とは矛盾する信念に基づく他の言説との間で生じる葛藤には決して悩まされることのない、狭隘ではあるが強靱な自我の確立へと人を導いてくれるだろう。自己とは異なる信念を抱く他者の言葉の存在しない内面的な世界で、絶対的な信仰と共に生きるということ。そのようにして唯一無二の書物の言葉に身も心もゆだねてしまうことで、内なる心の中の救いの感覚に基づく、揺るぎない自我の安定がもたらされるといっただ。

だが、そうした救済や安心のかたちは、むしろ少なからぬ問題をはじめから抱え込んでいる。まずもって、自己とは異質な信念を有する他者との共存の問題があるだろう。絶対的かつ自閉的な信仰に生きている者が、ひとたび外部へと向かい他者と付き合っていくとすれば、そこで

他者との信念の共有されなさによる対立や反目がしばしば生じてしまうことは避けがたい。この世にたった一人で、この世にたった一つの書物の教えに生きていたのであれば問題は無い。あるいは、自分のまわりに自分とは異なる信念を持つ人間が他にいないのであれば構わない。しかし、この世界には様々な教えを語る書物があり、多様な信念を持つ人間が存在している。この当然すぎる事実の前で、絶対的な信仰に開眼したという人間はときにつまずかざるをえないだろう。

さらに、そうした信仰を享受する当人にとってはより大きなつまずきの石として、人と本とのいわば蜜月的な関係が、どれだけ持続可能なのかという問題がある。当該の唯一の書物が、いつまでもずっと無二の本として、その読者の心を拘束し、彼の心を支え続けてくれるという保証は何もないのである。もしそれがかなわなくなったときには、上記したような自我の安定も、内心の救いも、もろくも崩れ去っていくはずだ。

そして、そのような安心の崩壊に人が直面したとき、人は唯一無二の本に傾倒することの隘路を痛感し、場合によってはまた別の道を探し求める必要に迫られることだろう。

明治から大正へ。元号とともに時代が移り変わるその移行期に、暁鳥はそうした書物をめぐる隘路からの脱出をはかるための、新たな一歩を踏み出していく。

三 本にかぶれる私

かつて心の底から感動した本が、あるとき読み直してみるとまったく心に響いてこない。あるいはこれとは逆に、昔読んで何の感慨もわかなかった本を、年月を経てから改めて読んでみると多くの発見があり、心が震える。ある程度の読書家であれば、この種の経験をすることが一度

や二度は必ずあるだろう。なぜそのような経験がありうるのか。本それ自体は、何も変わっていないはずである。であれば、変わったのはそれを読む自分の方なのだろう。紙上に並んだ言葉の内容や配置は変わらなくても、自分が変われば、それらの言葉の持つ意味は大きく変わってくる。この種の経験は読書の醍醐味の一つである。

大正初期の暁鳥のなかで、『歎異抄』という本の位置づけはそれまでと大きく変わっていった。

明治四十五年即ち大正元年から二年にかけて、私の精神上に一大変動が起りました。今まで始終読んでをつた『歎異抄』が、どうもあまり自分の胸に響かぬやうになりました。さうして、自分の心が今までのやうな甘い世界に陶醉してをられなくなつた。ずいぶん悶え悶えして、すべての自分の周囲が破壊され、自分自身も破壊されることを感ずる「六：四三八」

『歎異抄』は、彼にとつての無条件に肯定され賛美される作品ではもはやなくなつてしまつたというわけだ。それを読んで以前と同様の救いの感覚を味わうことはできず、気分もまるで落ち着かない。これはなぜだろうか。『歎異抄』という本それ自体は何も変わっていないはずである。であれば、変わったのはそれを読む暁鳥という人間なのだろう。いったい、彼に何があつたのか。

大正元年から二年にかけて暁鳥に起つた決定的に重要な出来事、それは、彼の妻の死と、その死の前後における悩ましき日々の経験である。

この経験のなかで大いに煩悶し、そしてその煩悶が『歎異抄』に基づく自己の信仰では解消することができなかつたという苦しい現実が、彼をして同書に対する無条件の信頼を失わせるに至つた。

病床の妻を在宅で看病していた頃から既に、そうした信頼喪失の兆候は表れていた。

病人に関係した自分に就いて考へてみる。病気が永いとすると、

自分は総べての進歩が止つてしまふやうに思はるゝ。他の友人はどんな／＼夫れ／＼の世間的の事業をやつて行くのに、自分はだん／＼凋落して田舎の土にもれてしまはねばならぬのか。だん／＼世に捨てられて行くのだなと思つては前途は闇黒である。「二一：一八」

清新な『歎異抄』論者として評価され、明治後期には宗教界における一定の地位を築いた暁鳥であったが、妻の看病のために都会での講演や執筆活動を行う余裕があまりなくなつてきたことで、そうした自己に対する評価が維持できなくなるのではないかという不安にかられた。立身出世の願望を抱いて革新的な宗教家になることを志した彼であつたから、そのような凋落の不安にさいなまれることは何ら不思議ではない。けれども、絶対的な信仰に比べればその有限性は明らかであるはずの「世間的の事業」にここまで拘泥してしまつてゐるところに、暁鳥が『歎異抄』から読み取つたという絶対的な信仰の、本来的な不確かさを見て取ることは、おそらく誤りではないだろう。同書に対する彼の一途な信頼の念は、もともとかなり不安定なものであつたようなのだ。

その不安定性は、彼の妻の死という厳しい事実を前にして、いよいよ本格的にあらわたつた。

私の佛陀は、妻の死と共に、いやがおうでも私の心から消えねばならぬやうになりました。自分は罪深い者であるが、この罪の深い私をこのまゝで抱き取つて下さるゝといふ都合のよい佛陀の恩寵は私から消えたのであります。佛陀若しさる大悲の力あらば、どうして私から最愛の妻を奪うたか、いや妻が死なねばならぬ運命だつたらなぜその運命をどうかしてくれらるゝことをしなかつたのか。妻の死と共に客観界に顕現すると思つた佛陀、丁度キリスト教徒のゴツドというてをるやうな超絶的佛陀はいないのであるとわかりました。

【二一：三〇】

『歎異抄』という聖書の中から暁鳥から抽出した、絶対他力の信仰、

そしてその信仰の本源である、キリスト教の神のような唯一的な存在である仏陀と、その恩寵。それらはみなすべて、彼の思い込みの産物であり、彼が思い描くようなかたちでは実在していなかった。十数年間にわたつてずっと傾倒してきた『歎異抄』と、その教え。彼はそれらを全身全霊で頼りにしてきたわけだが、その唯一の本への信頼と唯一の仏への信心は、彼にとつて辛すぎる現実を、彼をして耐えさせるには十分な内実を備えていなかった。

その挫折の経験は、しかし暁鳥を次のステージへと運んでいく。人生に挫折した読書家が立ち直り、改めて歩み始めようとするとき、その歩みを助けてくれるのは、やはり本を読むという行動であり、習慣であつた。『歎異抄』という一冊の書物への著しい傾倒は、どうも誤つた選択であつたらしい。であれば、一冊に縛られない多種多様な本を読み、そこから多彩な思想や知見を得ていかなければならないだろう。彼は、それまで以上に幅広く多量の読書を積み重ねることで、教養主義的な仏教者としての相貌をいよいよ強めていく。

と同時に、彼は自らの本に対する態度あるいは癖のようなものを、猛烈に反省していった。仏教者としての痛い挫折をもたらすきっかけの一つとなつた、自己の本に対する向き合い方には、いったいどのような問題があつたのだろうか。

大根を油揚げと煮ると油揚げにかぶれる、鯉魚と煮ると鯉魚にかぶれる、牛肉と煮ると牛肉にかぶれるやうに、私はいろ／＼の人や書物やにかぶれるのであります。私は清沢先生と居れば清沢先生にかぶれます、親鸞聖人の書を読めば親鸞聖人の書にかぶれます、(中略)かうして私はいつでも、かぶれたものを自分であるかの如く思ひもし、言ひもし、売つてもをるのであります。うすぺらな、徹底しないところに徘徊してをるのが私であります。これまで言うたり書いたりした事は、総べて誤魔化しであつたやうにも思はれ、又かぶれで

あつたようにも思はれます。かう言うてをる中に、何かにかぶれてをるのではないかと思ふと底気味が悪いやうであります。「二二五二」

人や本にすぐにかぶれて、その思想に安易に同一化し、それがあたかも自分の思想であるかのようにふるまってしまうという習性、そんな習性を持った自分を、暁鳥は徹底的に反省した。『歎異抄』の親鸞の思想にかぶれきり、親鸞に成り代わったつもりで絶対他力の教えを語っていたが、けっきよくのところその思想にかぶれていただけで、自らの確固たる信念を築くことはできなかった。そんな過去の失態が、このような深い反省を呼び起こしたことは疑いない。こうして自分が今まさに語っている言葉もまた、今かぶれている誰かの受け売りなのではないかという鋭い疑念も、徹底した自己反省から導き出される、自身の言行に対する懷疑的な意識であると考えてよいだろう。

そうした懷疑の念を抱くことは、彼にとって、しばしば少なからぬ羞恥や痛みを伴うものであった。

私はどうして、はつきりと私自身であり得ないのであらう。釈迦にかぶれ、耶穌にかぶれ、親鸞にかぶれ、日蓮にかぶれ、トルストイにかぶれ、ニイチエにかぶれて、人のものを吾がものと思ふやうな馬鹿げたことをするのであらうか。私は私の文章を読んで、それが純真な開かれゆく世界でなくして、私自身に開かれた世界、或は又、釈迦やキリスト等に依つて開かれた世界を基礎として拵へてある世界の記録であることを恥づかしくも思ひ、又痛ましくも思うてゐるのである。「二一：五四九—五〇」

読書によって他者の思想に感化される、そしてその思想を自分の思想であるかのように語ってしまう、こうして自分を見失つていく、それが辛い。他者の言葉に浸食され、他者の言葉にとらわれ、他者の言葉を通してしか世界に開かれなくなっていく、それが不自由な感じがする。ど

うして、私は私自身であり得ないのだろうか。

他者の言葉に浸食されて、他者の言葉に染まった自己の言葉を吐く。それは誰もが日々行っていることであつて、それほど悪い悩む必要のない、いわば当たり前の行動であるとも言える。だが、人並み以上に書物を読み、数多くの思想に影響を受けながら、なおも私自身として私の言葉で語りたいと熱望する人間にとって、その当たり前の行動を繰り返してしまうことは苦しみの原因となる。どれだけ他者の言葉に浸食されようと、あくまでも他ならぬ自分として生きて、自分の言葉で語っていきたい。だから彼は、他者の言葉と自己の言葉を意地でも切り分け、そうすることで自己の尊厳を回復していくための言論を、彼の発言に関心を示す他者と、それ以上に自分自身に対して、言い聞かせるように、まるで何かを願うかのように、情理を尽くして示していく。

教養主義者の救済論が、こうして語り始められる。

四 教養主義者の救済論

数多くの本を読んで教養を深めていくとは、どのようなことか。単に色々なことを知っている、というだけのことで決してないだろう。博識であることと教養が深いこととは、似ているようで微妙に違う。大量の本を読み知識を蓄えればいいのではない。そうではなく、その厚みのある読書によって人間やこの世界に対する洞察を磨き、自己の人生を、とりわけ内面的な生を、充実させていかななくてはならない。もしそれが出来るのであれば、本から得られる知識そのものに拘泥し続ける必要はないといつてよいだろう。

洋の東西を問わず様々な哲人や宗教家たちの著作に学び続けていた大正期の暁鳥もまた、それら個々の著作に書き記された知識としての言葉

自体は、最終的には意味のないものとして捨て去るべきものだと言じていた。

釈尊や、キリストや、孔子や、ソクラテスや、弘法や、法然や、親鸞や、道元や、日蓮や、ルーターや、オーガステンや、近くはニーチェや、キエルケゴオルや、トルストイや、イプセンや、ワイルドや、ストリンドベルヒや、彼等の言葉がいくら花やかに羅列せられたところが何にならう。先人の経験は先人にとりて意味あるものであり生命あるものではあるが、自分にとりては何にならう。(中略) 秦の始皇帝が天下の儒者を殺し、天下の書物を焼き払うたのは思ひ切ったやり方である。彼が利己的な考へから天下を愚かにする為にこんなことをやつたのは賞むべき事でないのは勿論であるが、真に自分の道を求めて精進する者は、総べてのよごれを捨てやらねばならぬ。「二二：二〇」

先人の智慧はあくまでも先人にとっての智慧であって、そこに何かしら学ぶべき要素があったとしても、自己の思想や人生にとっては究極的には不要なものである。だから、そのような他者の智慧を語る本など、場合によっては燃やしてしまっても構わない。書物から得られる知識それ自体に対する執着を否定する教養主義者らしいもの言いだが、それと同時に、本というものに対する暁鳥の愛憎なかなげな思いもまた感じさせる記述である。彼は本を心から愛していた。だからこそ、自らを見失ってしまうほどに愛した本によって、自己の思想が否応なく左右されるその独自性が損なわれてしまうことが憎かったのである。

大好きな本を読むことによって教養を深めていきたい。だが、その本の思想にかぶれて自分を見失うことは何としても避けたい。そうした葛藤に満ちた思いを突き詰めていった果てに、暁鳥は、たとえば次のような論を提示してみせる。

人間に若し迷ひといふものがあるならば、自分でないものになり

たいといふ心ほど甚だしい迷ひはあるまいと思ひます。釈迦のやうになりたい、キリストのやうになりたい、ソクラテスのやうになりたいとあせつたり、親鸞や日蓮のやうになれないといつて悲しんだりするのは愚かなことである。(中略) 私達は、誰にもなれないのであります。同時に、釈迦もキリストも親鸞も日蓮も、決して私のやうにはなれないのであります。私が彼のやうになれないから、彼は私より優れてをるともいはれない。また、彼が私のやうになれないから、私が彼よりも優れてをるともいはれない。「二六：一一五」

これは、かつて釈迦やキリストやソクラテスや親鸞や日蓮になりたいと願った人間だからこそ、少なくともそのうちの誰かにはなりたいたい人たちの思想にかぶれ、賢人たちに自己を重ねて、だがそれではいけないと反省したからこそ構築された論理がその背後には確実にある。どれだけ尊敬すべき偉大な他者に影響されようと、私は私であって、他の誰にもなることはできない。それは自分が他者に比べて卑小だからなのでなく、私はどうしても私でしかありえないから、そうはなれないのである。

こうした発言だけを部分的に切り取れば、ここで暁鳥が述べていることは単なる自己中心主義者の独り言に過ぎないと受け取られるかもしれない。だが、このような彼の発言の裏には、多量の読書を通じた無数の他者との長期にわたる思想的対話があり、だから聞くに値するだけの重みがある。その思想的対話において、彼は何度も他者の言葉に飲み込まれそうになってきたし、実際に『歎異抄』に記された親鸞の言葉に溺れてきた。そして、そうした失敗の経験を反省した後で、他者の言葉の海に潜っても決して溺れることのない自己を確立しようと努力してきたからこそ、先のような発言が出来たのだし、あるいはまた、次のようなより発展的な言論をなすことも可能なのだ。

私は釈尊の生活のやうにしようにとも思はず、親鸞聖人の生活のやうに、ソクラテスの生活のやうに、トルストイの生活のやうに、清沢先生の生活のやうにしようにとも思はない。私はたゞ私の生活を、私の道を行けばそれでよいと思うてゐます。私は先生を模倣しようと思つてもだめであらうが、模倣しようと思ふこともありません。先生は先生、敏は敏であります。この一人の道といふことに、先生と私との接触があり、親鸞聖人と私との接触があるのであります。私が親鸞聖人にうれしく思ひますのは、聖人が釈尊の生活にも、法然上人の生活にも、聖徳太子の生活にも習はずして、自分御一人の道を進ませられたといふ点にあるのであります。「二一・一〇五」

私は尊敬すべき他者の道ではなく自分自身の道を行く。そう決意したとき、その尊敬すべき他者もまた別の私として、彼が尊敬する他者とはまた別の自分自身の道を行っていたことに気づく。誰もがそれぞれに私であり、それぞれが別々の道を行く自分自身だからこそ、逆説的にだが、その別々の道を行く者としての共通性において接触しうる。人間は互いに同じ道を行くから出会うのではない。そうではなく、それぞれがそれぞれに違う道を行くという自覚において、はじめて出会えるのだ。

暁鳥はここでも親鸞に自らを重ねているわけだが、しかしそれはかつてとは異質の仕方によってである。以前の彼は、親鸞と自分が同じ道を行っているとついこみ、その教えを盲信することで内心の救済感覚に満たされていた。それに対して今の彼は、親鸞が自分とは別の道を行く一人の人間であることを受け入れた上で、そこに同じく一人で歩み続ける人間としての自らを重ね、そうすることに喜びを感じながら、この偉大な先人の言行に学ぼうとしているのである。他者の言葉に決して依存することなくその他者に学ぶ地点へと、彼は到達したのだといつてよい。

この地点に到達してはじめて、暁鳥は教養主義者としての自己を心底

から肯定することができるようになった。書物に表現された多くの他者の思想に接触しつつ、だが、それらにかぶれることなく、ひたすら自身に立脚するということ。その地点の中心で、彼は声を大にして自己を叫ぶ。

「天上天下、唯我独尊」と叫んだ釈尊を慕ひ、「神は死んだ」と叫んだニーチェを親しむ私の心をきいて下さい。絶対的のエゴイストであるところの私の衷心の叫びは、全人間の衷心に蟠まれる魂の姿であると信知してゐますから、私のこの手記を読んで、万人が悉く、衷心の共鳴——或る者は恐れつゝ、或る者はなやみつゝ、或る者はよろこびつゝ、或る者は不明瞭に——をするにちがひないと信知してをります。「二一・二六一」

たとえ神も仏も存在していなかつたら、ただ一人の我としてこの世界に立つ。この単独者の心の叫びには、多くの人間が共感してくれるに違いない。こうした宣言は、他の誰にも頼ることのない孤独な人間の雄叫びであるかのように聞こえる。だが、その宣言が釈尊やニーチェの引用とともに行われていることからわかるように、それはあくまでも、書物に刻まれた他者の言葉に学び、他者の言葉とともに発せられているのである。

本は、おそらくそれ自体で人を救うものではない。そこに書かれた言葉の意味が読者がしっかりと身に着け、自分が他ならぬ自分として立ち続けていくための力を与えられたとき、はじめて本は人の生に貢献する。そこには、他者への全面的な依存による安らかな救済の時空は存在しないかもしれない。だが、自分自身への信頼に基づく、労苦と歓喜に満ちた自己救済に至るための道が、きつと開かれているはずである。

おわりに

今日、書物というメディアは大きな転換期を迎えているとされる。電子書籍の台頭により、紙の上に印刷された文字の集合としての本を手に取り読むという、従来の読書のかたちが自明ではなくなりつつあることに加え、インターネットという新たな情報技術の普及によって、そもそも書物というメディアそのものの有用性が疑問に付されるようになってきた。これまで書物という、固定的かつそこに掲載可能な文字も物理的に制約される媒体に記されていた言葉たちは、デジタル化と情報化の技術によって、パソコンやタブレットやスマートフォンといった多様なメディアを利用すれば、いつでもどこでも、文字数にほぼ制限なくアクセスすることができるようになっていく。その利便性から判断して、紙の本というメディアはもはや時代遅れとみてよく、その未来もあまり明るいとはいえない。

だが、書物をめぐるメディア環境がどれだけ変化しようとも、文字言語を通して特定の著者の思想にふれるという営みは、今後も変わらず続けられていくことだろう。誰かの言葉や文章を読んで感動したり、生きる知恵を与えられたり、救われたりする経験は、その言葉を運ぶメディアが何であるかにかかわらず、将来も確実に存続していくはずである。本論が検討してきたような暁鳥による他者の言葉との接し方も、後世において、また似たようなかたちで繰り返されていくことがあるだろう。彼のような過去の偉大な読書家たちについて、我々がときに念入りに考え直していくべきなのは、そのようにして現在も未来も、我々が他者の言葉とともに生き、それによって自己の生を規定されるという経験が続いていくからであり、そしてそうした経験を先人のそれとともに深く思考していくことが、我々の言葉との接し方を洗練させ、現在の生をより豊かにしてくれるからにほかならない。

注

(1) なお、本論で引用される暁鳥の文章は、すべて『暁鳥敏全集』（涼風学舎発行）に掲載のものである。引用箇所は、「巻号：頁数」で表記した。また、暁鳥に関する伝記的な事実については、主に野本永久『暁鳥敏伝』大和書房、一九七四年、および松田章一『暁鳥敏 世と共に世を超えん（上・下）』北国新聞社、一九九七・一九九八年を参照した。